

在宅医療への検査技師の関わり

躍進する臨床検査～在宅で活躍する臨床検査技師を目指して～

◎猪田 猛久¹⁾社会福祉法人恩賜財団 済生会 中和病院¹⁾

少子高齢化、団塊の世代が後期高齢者となり、4人に1人が75歳以上となる2025年に向けて、地域包括ケアシステム構築を目標に地域で行政、医師会、病院、介護関係者を交えてさまざまな取り組みが検討されています。病院完結型医療は限界であり、地域の多くの方と協力していくということです。そういった地域医療で今後何らかの病気を持ちながら自宅や施設などで過ごす、在宅医療を必要とする患者さんが増えると考えられ、地域医療で在宅医療は欠かせないものと思われれます。

高齢化社会をむかえるにあたり、在宅医療の必要性が増す中、医師の都市部等への集中化や看護師不足も今後大きな問題になると思われます。そのような時代で我々検査技師はただ病院で検査をしているだけで良いのでしょうか。我々もできることは積極的に行い、高齢化社会を支える一員になることが必要です。

在宅医療への検査技師の関与は日臨技がこれから力を入れて取り組もうとしており、昨年それに関する本も発行され、今年も在宅に関する研修会が日本在宅医学会に合わせて4月に開催されました。我々検査技師も在宅医療に関与していく必要があるとの考えです。実際在宅医療に関わっている検査技師もおられ、医師の中には検査技師に関わる方が良いと考えている方もおられます。その中で我々検査技師は何をすればよいのでしょうか。

1. 昨年自動化学会の泰川先生の話ですが①血算・生化学などの検体と結果の受け渡しをスムーズにしたい。②検査結果を関連施設と共有したい。③在宅エコーや内視鏡に協力してくれる技師がいるとありがたいとの話がありました。これらのことは実際在宅の医師が実感していることであり、各施設いろいろな事情はあると思われますが取り組む必要があり、出来る1つと思われれます。

2. 在宅医療で検査に特化してエコーなどを中心に検査を実施していく形態もあると思います。昨年や今年の日臨技のシンポジウムや自動化学会で実際仕事をしている方の話を聞きましたが頑張っておられたが、

まだまだ少数だと認識しています。就職などの斡旋を在宅学会などを通して今まで以上に働きかける必要があると思います。

3. 在宅医療で看護師は必要ですが実際看護師は看護師しかできないこと以外のマネジメントなどの業務も行っている場合があります。これらのことを一般の方が行っている施設もあります。また医師と同伴する場合で看護師が必ずしも必要でない場合、一般の方が医師と同伴する場合もあるようです。これらの業務は検査技師が行っても問題ありません。在宅医療では点滴などの頻度は少ないため検査技師が医師に同伴して在宅医療に関わっていくことは十分可能です。そのような場合一般の方が同伴するより医療スタッフがいてくれた方がありがたいといわれます。臨床検査技師が検査以外の事をするに違和感を持つと思われれますがこれらのことをしながら検査が必要な場合には検査を実施していく、このような形態もあつていいように思います。もちろんNSTなど検査技師の知識を入れていけばより良い医療ができると思います。必要に応じてその場で検査を実施すれば合理化ができ、それと同時に、看護師の負担を減らせることは可能と思われれます。

高齢化社会をむかえる時代に看護師の数は不足していると思われれます。2025年問題は一時的でその後高齢者は減少に向かい看護師不足は一過性と考えられる方もおられます。しかし在宅医療に我々検査技師も関与する方がより質の高い医療が提供できるのは間違いのないと思います。このような時代に我々検査技師は病院で検査をしているだけではなく、積極的に地域医療に関わり、出来ることは行い、取り組んでいくことが必要だと思われれます。地域医療に看護師不足の解消だけでなくより質の高い医療を提供するためにも我々検査技師はやるべきことはたくさんあると思われれます。多くのアイデアを提供し、実践して地域医療に欠かせない存在になるべきと思われれます。